ブラケット付与による日本語諸方言のアクセント分析

東京大学大学院人文社会系研究科　言語学研究室　博士２年　平田　秀

日本語諸方言のうち､アクセントが弁別的なものの体系は以下のa～cの三種に大別できる (cf. 上野善道 1989)。

a. 式（文節全体の音調）の対立を持たない多型アクセント
b. 式の対立を持つ多型アクセント
c. 拍数に関わらず一定数の対立を持つN型アクセント

本発表では、上記aの体系を持つ方言として標準語を、上記bの体系を持つ方言として三重県鈴鹿市方言を、上記cの体系を持つ方言として鹿児島県鹿児島市方言を取り上げ､Halle and Idsardi (1995)で扱われているブラケット付与による音韻論的解釈を試みる。標準語ではn拍語にn+1個の対立が、鈴鹿市方言ではn拍語に理論上2n+1個の対立が、鹿児島市方言では拍数に関わらず2個の対立が存在する。

また、上記 a の体系はアクセント核の「位置がどこか」が問題になるという点で諸言語にみられる強勢 (stress) と、上記 c の体系は型の「複数種のうちのどれか」が問題になるという点で声調 (tone) とそれぞれ共通する性質を持つことを指摘し、実際の語例によって例証する。その上で、上記 b の体系はアクセント核について「位置がどこか」が問題になり、式について「複数種のうちのどれか」が問題になるという点で、強勢的要素と声調的要素が独立して共存しているアクセント体系であることを述べる。

参考文献

上野善道 (1989)「日本語のアクセント」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育　第２巻　日本語の音声・音韻（上）』明治書院: 178-205.

Halle, Morris and Idsardi, William (1995) “General properties of stress and metrical structure” In Goldsmith (ed.), *The handbook of phonological theory*, 403–443. Cambridge, MA & Oxford: Blackwell.